

2015年11月7日
企画委員会

第六回「私の主張」の会が開催されましたので、概要をご報告します。
今回の出張のキーワードは「ひとり情シス」です。自社の情報システムを一人で立て直したご経験から、中堅中小企業における「ひとり情シス」実現の経緯やその有効性と今後についてお話を頂き、参加者と活発な意見交換を行いました。中堅中小企業のIT活用は学会にとっても重要なテーマと考えています。今後もこのテーマについて継続的に取り組んでいきたいと思っております。

第六回「私の主張」の会概要

1. 開催日時 2015年11月4日(水) 18:00~20:00
2. 開催場所 専修大学神田キャンパス7号館773教室 参加者 11名
3. 発表者
黒田 光洋 氏 (民間企業で情報システムの管理・構築をご担当)
4. 主張の概要

(テーマ) 中堅中小企業のIT活用のカギは「ひとり情シス」にあり
(発表の概要)

「ひとり情シス」は、中堅中小企業のIT活用における現実解である。はじめに「ひとり情シス」が実現した経緯を、そして次になぜ「ひとり情シス」だとうまくいくのかについて紹介する。

(1) 「ひとり情シス」の経緯

「ひとり情シス」の舞台となったのは、従業員数400名ほどの中堅企業。社内で約250台のサーバを運営、業務システムの開発(内製と外注)とIT全般のサポートを行っている。

従来会社はIT投資に積極的だったが、景気後退に伴いピーク時10名居たIT担当も1名に縮小、IT部署もなくなり業務部門に所属が変わり、兼務で最低限の維持管理をするだけの状況となった。

この状況を解消するため、「まず、やれることはやろう」と、ツールによる兼務業務の効率化、サーバ管理の内製化、DBの統合などをひとりで実施した。

サーバ仮想化技術、OSの信頼性向上、フリーソフトの普及などの技術面での追い風もあり、また老朽化リプレース投資に対する会社の理解もあって、サーバ60台の仮想化(8台へ)、基幹システムWeb化、BCP対策(サーバ200台を20台に集約)などを実施できた。

オーダーメイドシステム開発を求めるユーザ対応を効率化するため、それに必要なソフトをパッケージ化し、これをベースに個別開発に対応することとした。使用するソフトをフルに使いこなすには多くの技術知識が必要だが、その中で自社にとって必要なものだけに絞ることで、数多くのソフトの利用技術を習得することができた。

(2) なぜ「ひとり情シス」だとうまくいくのか

ユーザ企業の IT の現状を日本と米国で比較すると、日本では人材の流動化が進んでいないことや、パッケージ化、内製・外注化のバランスの違いなどがあるが、米国では IT 技術者の 70% がユーザ企業に所属している点（日本は IT 技術者の多くがベンダーやソフト会社に所属）は大きな違い。

日本の中堅中小企業の IT には、超人材不足、IT の高度化・複雑化でより多くの知識が必要になったがそれを学んでいる余裕がないことなど、手間が掛かるが儲からない先として IT ベンダーから敬遠されるなど多くの問題がある。組織の面では、IT 部門が企業の中で孤立したアイランド組織（上層部の IT の理解が得られず、経営層に声が届かない。その結果、業績も評価されない）となっていることは大きな問題である。

「ひとり情シス」実現のポイントのひとつが、良い道具への投資である。良い道具があつてこそ成果が出せる。

システムに手が掛かる原因（つくりが悪い、運用が業務に問題があるなど）を見つけて解消することも必要となる。

またユーザから情報システムの価値をアピールしてもらうことも重要で、何事もやりたい人（ユーザ）が動かないとうまくいかない。

後継者を育て、持続可能な「ひとり情シス」を目指すためには 3 つの課題がある。

- 1) 即戦力人材養成のための教育機関を作ること
- 2) 少人数での企業情報システムを監査しサポートする第三者機関作り
- 3) 「ひとり情シス」を担当する人のネットワーク作り

「ひとり情シス」は、IT の進化を味方につけて、ひとり（少人数）でも運営できる環境を作る技術者「Solo Integrator」と考えていくことが今後重要だと考える。

（当日の意見交換から抜粋）

- 人的なリスクを考えると二人情シスが適当ではないか
 - 後継者作りの観点からも年齢差のある二人情シスがベスト
- 他社に横展開ができるとメリットがあると思う
 - 横展開を学会として支援できないだろうか
- 内部統制の視点も考える必要がある
 - 第三者機関による監査と関連するテーマ（記録者補足）
- この考え方を誰にアピールするかが大切
 - 中小企業の経営者に伝えたいことばかりだ
 - 大手企業でも IT 人材の部品化（経験できる分野の矮小化）が顕著、大手企業にも伝えたい内容だ

以上

（記録：甲斐荘正晃）